

## 人を毒する「三つの煩惱」とは何か 何で上手くいかないのか

平成二十七年六月二十二日

人間には、誰にも心の迷いがある。これを仏教では「煩惱(ぼんのう)」という。百八煩惱というくらいに、人の心はさまざまに迷う。

なかでも、最も人の心を毒す代表的な煩惱が三つある。

「食欲(どんよく)」、「瞋恚(しんに)」、「愚痴(ぐち)」、略して「食(とん)」、「瞋(じん)」、「痴(ち)」とい、これを三毒とよんでいる。

「食欲」とは、むさぼりの心であり、自分だけがうまい事をしようとする強欲な心である。

人間の欲には五つある。

食欲、睡眠欲、性欲という本能的欲望のほかに、財欲、名誉欲というものがある。これが五欲である。

こう書けば、「食べる」ことも、眠ることも、愛することも、みんな欲か」と、びっくりする人もいるだろう。

「過ぎたるは、及ばざるがごとし」という孔子のことばではないが、「何(なに)こともほどほどにせよ」ということだ。食べ過ぎ、眠り過ぎ、愛し過ぎは早死のもとである。

財欲も、同じことである。だいたい、うまくいっていない人間ほど、目先の利益を追っかけている。こういう人は、相手の利益など考えない私利私欲だけの人である。

名誉欲も財欲も同じである。

自分の脳力以上のものを望んでも、ついには勲章の重みで潰されてしまうのがオチである。はやく、世の中のためにつくす「大欲」に変えてもらいたいものだ。

「瞋恚(しんに)」とはいかりの心である。「よく怒る人は、欲が深い」という。

たしかに、欲の深い人はわがままで怒りやすい。このように、食と瞋は親戚である。

「怒り」というのは、瞬間湯沸器のようにすぐカッとなることをいう。

何かが心のカンにさわると、たちまち怒り出し、ねちねちと嫉妬心から瞋ることが多いのである。

「生きかわり、死にかわり、たとえ地獄の果てまでも、この恨み晴らさずにおくものか」というやつで、これが、いちばんおそろしい。腹を立てて、すぐ喧嘩するのは、この上もなく愚かなことである。

おしまいには、「愚痴(ぐち)」である。

自分の望みがかなえられない、となると、愚かな喧嘩をはじめ。それに負けると、こんどは愚痴をいう。

だいたい、食欲や愚痴の心で世の中を生きているから、他の人が困ることが分からないのである。それでいて愚痴をいうから、救われない。

「痴(ち)は、(やまいだれ)に知と書く。つまり、知恵が病気なのである。

ついでに述べるが、愚痴は、梵語(ぼんご)で「モーハ」という。それが、なまって馬鹿になったのだそうだ。